

美術への主体的なとりくみを促す指導の在り方

－「表現と鑑賞のつながり」を意識した焼き物の授業実践を通して－

1 設定理由

日頃の少ない授業で教員は、生徒が満足いく作品にしたいとの思いから、生徒に指示や助言を簡単に言ってしまう傾向があり、ともすると、指導者側のイメージを生徒に具現化させている状態に陥りかねない。それでは生徒の主体的なとりくみを大切にする授業になっていないのではないかと考えた。千葉市では、主体的な造形活動の重視、及び、生活の中で美術が生きて働く実感をもたせる学習の必要性が謳われていることから、主体的に学び、美術の働きに実感的な理解を深める指導の在り方を探りたいと考え、本研究主題を設定した。本実践では、表現と鑑賞の一体化を意識し、鑑賞で得た力がより発揮されるような表現活動を、制作後に再度位置付け、鑑賞が表現の鑑賞の後ろ盾となるようなつながりを意識した授業を目指すことにした。題材は、日常的に手に触れながらも何気なく使っている焼き物に着目して「作品完成後のふり返し」を改めて見直し、「表現と鑑賞のつながりに着目した指導のあり方」を検討した。

2 研究仮説

- (1) 発想・構想の土台となる「気づき」「思考の深化」をさせていけるよう、表現と鑑賞のつながりを工夫した授業を行うことで、自分をとりまく美術を実感できれば、「生活と美術の関わり」や「美術のもつ力や働き」に対する理解が深まるであろう。
- (2) 美術の、生活との関わりや働きに対して、理解を深めることができれば、生徒は日常生活により主体的に関わるようになるであろう。

3 研究内容

- 主体的なとりくみのために用いる「課題解決(追究)型」の授業デザインの開発
- 「表現と鑑賞のつながり」を意識した授業デザインの開発
 - ① 事前調査の実施・分析・検証授業の計画・実施
 - ② 検証授業後の分析・考察(事後調査を含む)

4 結論

- 課題解決(追究)型による授業デザインの各段階での支援により、自分で気づき考えたことをもとにした表現意図を明確にもって、主体的な創造活動ができた。
- 作品がもつ様々なよさや価値に対する見方・考え方の視点が広がり、美術と生活との関わりに理解を深め、生活への関連を実感させることができた。
- 授業デザインは他にも、特に「伝える、使うなどの目的や機能を考え、発想や構想する力」を育む上で、十分汎用性があると考えられ、マーク図案の学習をこの授業デザインによって行ったところ、発想段階において視点をもたせやすくなり、とりくみに主体性を促すことができた。

1 研究主題 美術への主体的なとりくみを促す指導の在り方 —「表現と鑑賞のつながり」を意識した焼き物の授業実践を通して—

2 主題設定の理由

次期指導要領改訂にむけた「審議のまとめ」(2016)の中で、現状と課題について「生活を美しく豊かにする造形や美術の働き、美術文化についての実感的な理解を深め、生活や社会と豊かに関わる態度を育成することが求められている」とある。2017年(平成23年)にまとめられた国立教育政策研究所中学校特定の課題に関する調査では、美術の学習は普段の生活に役立つと思うかとの質問に肯定的に答えた生徒が47.8%であった。教科がめざす方向と生徒が日常生活に美術が関わっている実感との間には、開きがあることが伺われる。

大橋(2015)も、美術の学習活動について、「美術の学習活動の大半は、教員が一方的に内容を伝達するのではなく、生徒が活動を通して学んでいくスタイルではある。しかし、だからといってそれが児童・生徒の主体的あるいは能動的な活動であるとは言い切れない。児童・生徒を使って指導者側のイメージを具現化されているだけのような授業では『描かされている、つくらされている、見せられている』だけ」と述べている。日頃の少ない授業で教員は、生徒が満足いく作品にしたいとの思いから、生徒に指示や助言を簡単に言うてしまう傾向があることは、自身の経験も踏まえ感じている。それでは生徒の主体的なとりくみを大切にする授業になっていないのではないかと疑問をもった。

千葉市においても、主体的な造形活動の重視は目標になっていることから、主体的に学び、美術の働きに実感的な理解を深める指導の在り方を探りたいと考えた。

西村(2016)は「美術科教育で培われる力は、『つくる』と『みる』の両者のバランスの中で育まれるものであり、つくることがみることの、みるがつくることの後ろ盾になって、はじめて成立する。鑑賞と表現の一体化を意識し、鑑賞で得た力がより発揮されるような表現活動を、その後に位置付けるなどして、学習の過程を構想していくことが大切である」と述べている。このことから、本実践では、表現と鑑賞のつながりを意識した授業をめざすことにした。

また、村上(2016)は、「学んだことが生活の中で生きて働いていることを実感できることが重要である。」と述べている。そこで本研究では、生活の中で生きて働く題材として、日常的に手に触れながらも何気なく使っている焼き物に着目する。

3 研究仮説

- (1) 発想・構想の土台となる「気づき」「思考の深化」をさせていけるよう、表現と鑑賞のつながりを工夫した授業を行うことで、自分をとりまく美術を実感できれば、「生活と美術の関わり」や「美術のもつ力や働き」に対する理解が深まるであろう。
- (2) 美術の、生活との関わりや働きに対して、理解を深めることができれば、生徒は日常生活により主体的に関わるようになるであろう。

4 研究のねらい

焼き物題材を通して、表現と鑑賞のつながりを意識した授業構成の在り方を探ることで、美術への主体的なとりくみを促す。

5 研究の内容

① 主体的なとりくみのために用いる「課題解決(追究)型」の授業デザイン

佐々木(2011)は『課題解決(追究)型』の授業デザインは、子どもに造形的な課題(テーマ)を与え、子どもが自ら設定した課題を自主的・主体的に追究させていく方法で、造形活動における自主性や主体性を育てるのに向いている。(中略)子どもに造形的な課題(テーマ)を与え、それらをもとに子ども自らが設定した課題を自主的・主体的に追究させていく方法」と述べている。

「ただ自由にやりなさい」というものではなく、「育てる力を明確にし、(中略)条件の中で、造形的な課題を子どもに与え考えさせるよう、造形表現活動の環境を意図的に設定していくこと」とある。

本研究では、生徒自ら課題に向き合えるよう、課題解決(追究)型学習を用いる。課題(テーマ)は、使う人や環境、空間などの生活との関わりを考えると、焼き物題材で実践する。

②「表現と鑑賞のつながり」を意識した授業デザイン

「表現と鑑賞のつながり」に関して、新野(2014)は「受容(インプット)したことを、新たな目的をもって活用し、表現に出す(アウトプット)すること、さらには、授業の場だけの学習で終わらず実生活の中で美術の働きを理解して豊かな生活と関連付けて考えられるようになること」と述べている。本実践では、インプットを鑑賞と捉え、アウトプットを表現と捉える。生徒は、鑑賞を通して、自己や他者の作品のよさや価値に対する作品の見方・考え方、作品への愛着等に対する視点を広げ、理解を深める。その気付きや理解を基に、アイデアの提案・制作という形で表現につなげる授業デザインとする。

③鑑賞活動の意義

奥村(2016)は鑑賞活動が目指しているのは探求と創造であり、「自分の全身と作品とそれが置かれた文脈を問う活動を通して、自分の身体、経験、知識、考え、感情、価値観などを揺さぶり、深め、時に変化させる探求的な学習」であり、「私たち自身の生活や社会、文化などと密接に関わりながら、新しい意味や価値をつくり出す創造的な活動」と述べている。これをふまえ本研究の鑑賞活動では、既習の自他の作品の振り返りも含め、新たな見方・考え方を身に付け、表現活動の際には自分なりの意味や価値をもってとりくんでいけるよう、学習の充実を図る。

④「表現と鑑賞」の評価の方法

中教審(2016)では「音や色、イメージ、身体表現などにより対象や事象を捉えることを主とする教科(音楽や図画工作、美術、体育、保健体育等)においては、捉えたことをどのように言語化するかというところに言語活動の特徴がある。」と示された。話し合いでの言葉やワークシートの記述、構想を描いた絵や作品は、美術特有の言語活動であり、学習成果や姿の変容を読み取る根拠とする。

(2) 事前調査の実施・分析

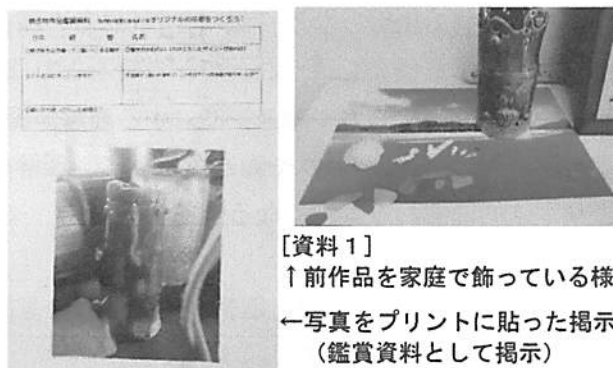
調査 平成 28 年 6 月 27 日～7 月 4 日

3 学年 177 人

「美術に対する意識」「焼き物作品を家庭にもち帰った後の実態」などを、質問紙調査により把握、分析した。

(3) 授業開発・指導法の検討

①課題(テーマ)の設定



[資料 1]
↑ 前作品を家庭で飾っている様子
← 写真をプリントに貼った掲示物
(鑑賞資料として掲示)

本研究では、使う人や環境、空間などの生活との関わりを考える課題(テーマ)を設定する。授業では、既習の花器作品と身近な焼き物の鑑賞から、「食卓を笑顔にする焼き物」と題して、アイデアの提案・制作による表現へと展開する。尚、既習の花器制作では、粘土の可塑性を生かした造形的な形と装飾の工夫をねらった。本研究での焼き物題材では、使う人や環境、空間などの生活との関わりを考え、作品がもつ様々なよさや価値に対する見方・考え方の視点を広げることをねらう。日常に根ざした視点に重きを置いた活動とする。

②課題解決(追究)型学習による授業デザイン(全体の授業デザインを、下記の[表1]に示す)

③授業デザインの中で行う重点

ア 各時間の明確な視点の設定

イ 他者と意見交流をする場の設定

ウ 「アイデアの提案」として見立てた表現の場の設定


④鑑賞学習における教員の支援

教員が、ただ「どう思う?感想は?」という漠然とした発問では意見が出にくい、「見たり触ったりしてわかる事実は何?」という発問であれば、「持ち手がついている、ざらざらしている」等の言葉が出てくるだろう。「なぜそうなっているのか?あなたはそれをどう思う?」と発問すると、「片手で注ぐのに丁度よい大きさの持ち手がある。ざらざらしているところが好き」というような解釈や意見が出てくるだろう。段階を踏んだ発問により、対象をよく見て味わうことや表現意図などを考えさせることができることから、ワークシートの書式や問いかけの言葉を工夫する。

(4) 検証授業の計画・実施【研究実践—1】

①検証授業の計画

ア 対象 千葉市立生浜中学校3学年6学級(193人) イ 期間 平成28年9月21日~12月22日

つながり一体化するイメージ	過程	学びの段階	主な学習活動	
input 鑑賞 作品のよさや価値に対する見方・考え方、作品への愛着等に対する視点を広げる	第1次	[気付き①]	<ul style="list-style-type: none"> 花器作品の鑑賞で感じたことをワークシートに記入・発表する。 焼き物文化に関する理解をする。 	
	第2次	[気付き②] [共有・広がり]	<ul style="list-style-type: none"> 生徒が持参したお気に入りの焼き物を鑑賞する。 観察してわかったこと、解釈したこと、自分の気持ちを付箋に記入する。 小グループで、付箋を活用して意見の交流と分類をする。 	
	第3次	[深まり] [視点の明確化]	<ul style="list-style-type: none"> 小グループで分類した付箋に、着眼点の見出しをつける。 各グループが発表し、学級全体で考えを共有する。 各グループの発表内容を通して見出した、焼き物作品がもつ様々なよさや価値の視点を、ワークシートに記入する。 	
output 表現 自分なりの意味や価値に対する考えをもつて形に表す 鑑賞 鑑賞	第4次	[課題の決定] [課題解決へのステップ]	<ul style="list-style-type: none"> 自分の重視する視点を決める。 表現意図を作品の題名で表す。 「食卓を笑顔にする焼き物」のアイデアスケッチをする。 アイデアスケッチに自分の表現意図の説明を書く。 アイデアを小グループで紹介しあう。 	アイデアの提案 
	第5次	[課題追究]	<ul style="list-style-type: none"> アイデアをもとに実際に粘土で制作する。 	
	第6次	[課題解決]	<ul style="list-style-type: none"> 完成作品を小グループ内で紹介、鑑賞する。 	
【課題解決】にあたる場面は、次へのinputとして始まっている				

[表1] 課題解決(追究)型学習による授業デザイン

②検証授業の実際

ア 第1次 花器作品を鑑賞して味わう【気づき①】

ねらい	既習の花器作品を改めて味わい、焼き物の良さなどについて感じとり、「気づき」をさせる。
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・自分や友人の「花器」作品を鑑賞する。 ・焼き物文化を学ぶ(粘土素材、郷土の焼き物、窯の様子、焼成の工程など) ・食卓用品について見直す。



【資料2】花器の鑑賞活

授業では生花を活け、花器作品、焼成前の花器の写真、家で作品を飾った様子の写真、作者のコメントなどを展示した。既習の花器作品の家庭での実態を教員との対話を通して作者から引き出した。改めてじっくり見て味わう場を与えると、ほとんどの生徒が作品をさわり、焼き上がりの感触や生花と合わせた雰囲気を感じていた(【資料2】)。感想や考えはワークシートに記述し、発表した。ワークシートの記述には、【気づき】の内容が表れている(【資料3】)。また、展開の後半では、千葉市には加曽利貝塚があることから地域の焼き物にも着目した。古くから粘土を形づくって土器を焼くという人の営みがあったことや、現代に至るまでの食器の変遷、粘土を焼く過程なども紹介し、生活と作品の関りに着目する場面をつくった。

- ・花器を置くだけで、その場の印象や空気が違って感じられるのは凄いなと思った。
- ・工夫して飾ると自分の作品にさらに味が出る。
- ・花と花器でお互いを高め合えると思った。
- ・手作り感があって、売られているものより良いと思った。美術っていいなと思った。

【資料3】ワークシートに記述されたもの【気づき①】

イ 第2次 お気に入りの焼き物を鑑賞して味わう【気づき②】【共有・広がり】

ねらい	事実から解釈を考えさせ、生活の中に息づく作品としての「気づき」をさせる。
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・持参したお気に入りの焼き物を鑑賞する。 ・観察してわかった事実、解釈したこと、自分の気持ちや考えを、ワークシートに記述する。 ・感じたことや考えたことを付箋に書き出したものを活用して、グループで意見交流と内容の分類・整理をする。



【資料4】個々に感じたことを書き出した付箋を持ち寄る様子



グループで選んだランチョンマットに家庭から持ち寄った焼き物を置き、まず、わかったことを記述させた。これにより「なんとなく眺める」ではなく、「しっかりと見る・さわる」という行動が促され、「ざらざら・ツルツル」などの触り心地や重さなど、見た目以外の特徴の他、作品を使ってきた愛着などの心情面に起因する要素にも注目することができた。次に、自分の解釈、つまりどう受け止め考えたかを記述させた。見たり触ったりしてわかった事実をとらえた上で解釈を引き出した後、持参した焼き物について「なぜ気に入っているのか・どこがよいのか」と段階的に発問し、出てきた気持ちや考えを付箋に書き出させた。段階を踏んだ発問という教員の支援により、様々な角度からの意見を具体的に書くことができた(【資料4】)。付箋に書かれた意見(【資

料5))は、小グループで話合っ内容や着眼点ごとに分類・整理をさせた。他者の感想や意見を共有したことで、考える内容に広がりをもつことができた。

- ・まわりの色によって器が引き立ち、よい感じになる。
- ・食べる時、温かみのある色の器だと楽しくなると思った。
- ・置いてある雰囲気、使う人が和める感じがする。
- ・安物だけど、毎日使っていて愛着がわいている。
- ・いびつな形が人の手で作られた感じがしてよいと思った。
- ・手ざわりが気持ちよい。
- ・自分の手にぴったりあう。
- ・祖母が買ってくれたものだから大切。

[資料5]付箋に記述された言葉 [気付き②]

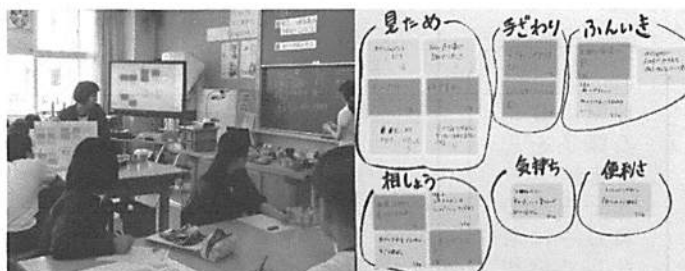
ウ 第3次 お気に入りの焼き物鑑賞から考える [深まり] [視点の明確化]

ねらい	作品と自分や他者、生活との関わりに対しての「考えの深まり」と、作品の魅力や価値について「視点の明確化」をさせる。
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・分類・整理をした付箋に、その内容や着眼点を端的に示す見出しをつける。 ・各グループが発表をし、学級全体で考えを共有する。 ・各グループの発表内容から、焼き物作品がもつ様々なよさや価値として求められている視点をワークシートに記入する。



[資料6]意見を整理し見出しを考える活動 [考えの深まり]

付箋に書かれた内容や着眼点を示す見出しをつける作業を小グループで行った。見出しを考える話し合いは、焼き物作品に対してどんなものの見方や受け止め方があるか、また、作品がもつ様々なよさや価値の視点について、考えを深める手立てとして効果的であった。同じ視点でも違う感想をもった人などがいることがわかり、様々な見方・考え方を深めた([資料6][資料7])。



[資料7]付箋を活用した全体発表の様子 [視点の明確化]

エ 第4次 「アイデアの提案」として構想する [課題の決定] [課題解決へのステップ]

ねらい	インプットした学びから作品に対する新たなよさや価値の視点を持ち、「アイデアの提案」という形で表出させる。
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・作品のよさや価値に対する様々な視点の中で、自分が重視したい視点で作品に意味付けをして構想し、アイデアを提案する。 ・表現意図を表す作品の題名を考える。 ・アイデアスケッチで表す。 ・アイデアスケッチに、言葉による表現意図の説明を加える。

鑑賞でインプットしたものを表現でアウトプットするために、「アイデアの提案」という場面を見立てた。日常生活に関わる実感をもたせたり、作品を通して人と関わったりできるよう『食卓を笑顔にする焼き物 ～こんな作品あったらいいな～』とテーマを与えた。その際、発想への支援として、誰がどんな時に使って笑顔になるかをイメージし、その作品をとりまくストーリーを考えて表現意図をもつよう助言した。生徒は作品の付加価値を考えたり、生活の中から必要性を見出したりして、様々な視点の中から自分が重視する視点考えた([資料8])。

3. 求められるもの(こと)・ニーズ

テーマ・お題 食卓を楽しくする焼き物

便利さ、实用性、色、おいしさ、見た目、さわやか、おいしい、思い出、手づくり感、ユニーク

自分の作品に重視したい視点を決め、○で囲んだ

次に、表現意図を端的に表す作品の題人を考え、アイデアスケッチを描いた。表現意図を説明する言葉をアイデアスケッチのわきに言葉で添えることは、構想をより具体的にするものとなった。この発想段階の一連の活動が「課題解決へのステップ」である([資料9])。

4. アイデア

①「あったらいいな、誰かに笑顔を届ける焼き物」というコンセプト作品の良いアイデアを

作品タイトル: 『お子様ランチ風小皿』

②アイデアスケッチ(絵に、作品コンセプトを説明することを覚えて下さい)

自分の家庭生活と妹のことをイメージし、作品を通して願いを込めた

表現意図を表した作品の題名

日頃の食卓の様子を思い描き、ニーズと作品の楽しさに着目して構想した

向かいあつたお皿の油はこも入る。

お子様ランチ風で色んなものを盛り合わせるから好き嫌いなくなる。

ハンバーグ、サラダ、プリン、リゾット

ちまみちよ

しょう油、マヨネーズ、チョコと厚巻の美味しい、ミニトマト

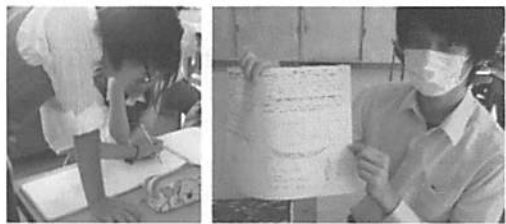
いもむし

横に広い皿だから家族で食べる時も「飽かない!!」が減る。

小はな子用のゆい「お子様ランチ」形にしました。

[資料9] 作品の題名・アイデアスケッチ・表現意図を説明した言葉 [課題解決へのステップ]

さらに、人に伝えることで作者自身にとっても表現意図がより明確になると考え、「アイデアの提案」と見立てた場面設定をし、小グループ内でアイデアスケッチを紹介しあった([資料10])。これも「課題解決へのステップ」である。この場面では、アイデアのよさを相手に理解してもらうために、自分の作品のもつ様々な付加価値を説明する言葉が次々に発せられた。このことにより、自身の表現意図の再確認ができたこととしても効果的であった。「それ、いいね。あったら買いたい」「こうしたら更にもいいよ」などの声が上がリ、考えを認められた喜びや考える楽しさを味わうこともできた。



[資料10] 「アイデアの提案」として紹介する活動 [課題解決へのステップ]

オ 第5次 実際に制作する〔課題追究〕

ねらい	既習の表現技法を活用して実際に制作することで、構想した表現意図を実際の形にする。 『食卓を笑顔にする焼き物』
内容	・既習の技法や材料を扱う留意点を確認する。 ・制作する。

アイデアを粘土 500 g で実際の形にした。絵から実物にすることで、大きさや丸みの形などを具体的に味わい、実際に手に持った感触を確かめて、アイデアの実現にせまることができた（〔資料 11〕）。

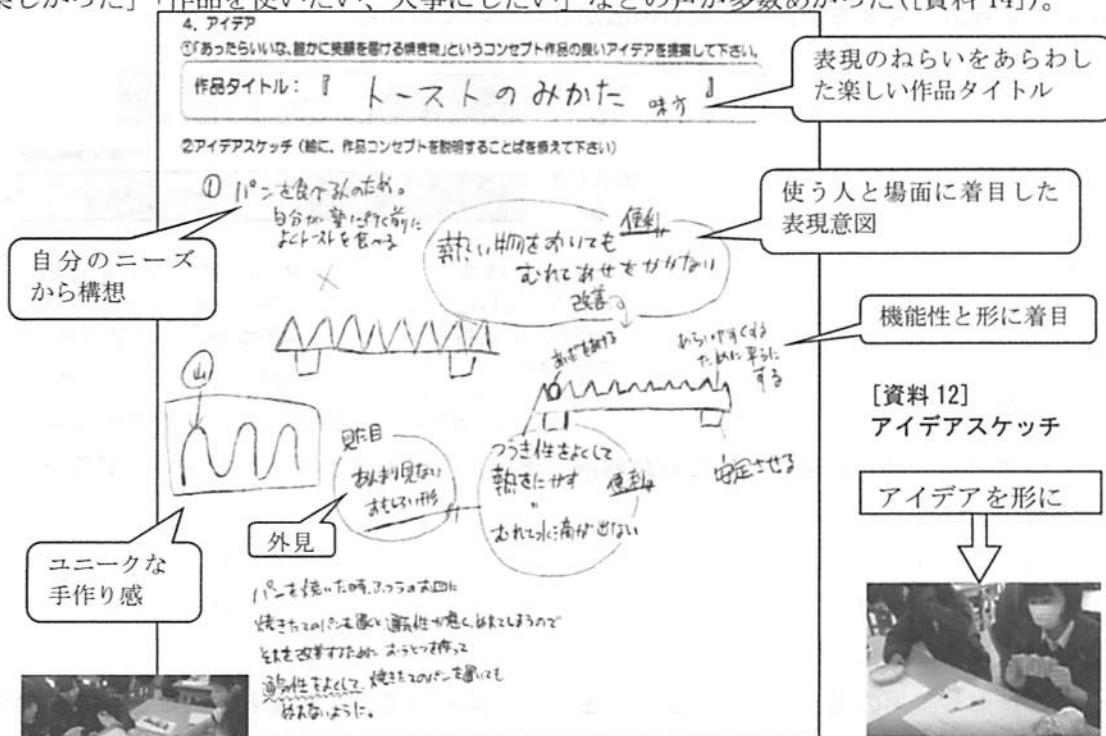


〔資料 11〕
構想から実現へ〔課題追究〕
実際に粘土で制作する様
（右：〔資料 12〕のスケッチの生徒）

オ 第6次 焼成した焼き物作品の鑑賞〔課題解決〕

ねらい	作品の機能美、造形美、作者の思い、作品と人、作品と環境との関わりなどについて、改め考え、学習のまとめをする。
内容	・焼成した作品を鑑賞し、小グループ内で作品の紹介をしあう。 ・学習のまとめをする。

課題解決として、焼いた完成作品を小グループ内で紹介しあい鑑賞した。自分の表現意図を語るとともに、その場で質問や感想をもらい、作品を通して交流した。互いの作品を眺めるだけではなく、作品について意見交換をした。特に、友人から自分の作品の感想をもらったことは、制作の喜びや作品への愛着に対し、一層の手ごたえを実感させることに効果的であった。最後に鑑賞したこの一連の学習過程が、「自身の花器作品とお気に入りの焼き物鑑賞」でインプットしてきた学びを、アウトプットした表現のまとめとして、課題解決となった（〔資料 12〕〔資料 13〕）。互いに作品に触りながら、制作はもとより「アイデアを考えることが楽しかった」「意見を聞くことが楽しかった」「作品を使いたい、大事にしたい」などの声が多数あがった（〔資料 14〕）。



〔資料 13〕
「作品に重視したい視点」〔資料 7〕が表現意図に表れたアイデアスケッチをもとに、完成した自分の焼き物作品を紹介しあう様子

- ・自分の考えたものが形になってすごいと思ったし、作っていてすごく楽しかった。使おうと思う。
- ・つくることが好きということに気付けた。よかった。
- ・作品を使っているところを想像するとけっこうおもしろいし楽しい。
- ・自分の作品のことを聞くのも楽しい。使いたって言われた。
- ・秘めている可能性を生かせなかったのは残念だが、形が整っていることが良く思う。
- ・実際に使えるし、置物としてもよいということが気に入っている。

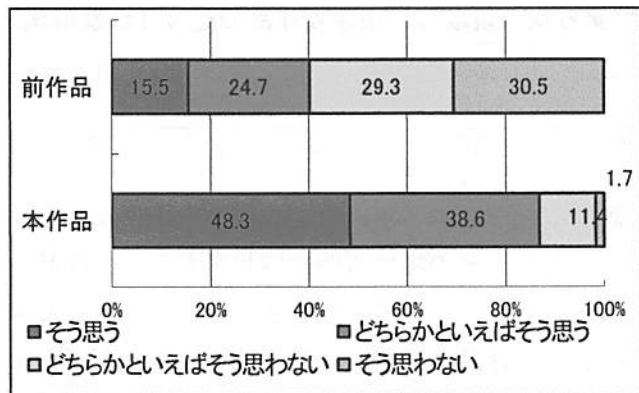
[資料 14] 作品鑑賞による意見交流後の自由記述〔課題解決〕

(5) 検証授業後の分析・考察

調査 平成 28 年 11 月 1 日～11 日 3 学年 176 人

①表現意図を明確に持たせる手立てについて

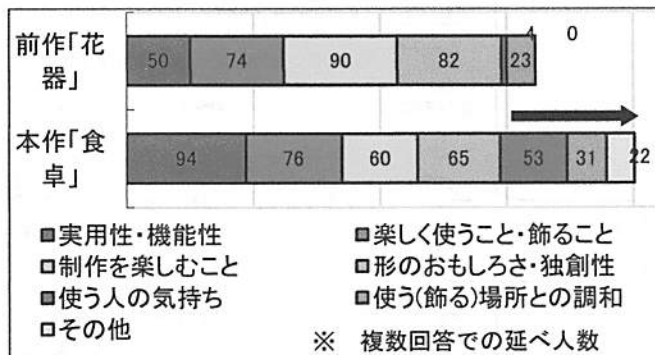
本実践の授業デザインでは、食卓を楽しくする焼き物をテーマに、それをどう表すかという「表現のねらい・仕方」の部分で自己決定をさせた。「使う人の気持ちや使う様子のイメージをもってとりこんでいたか」という質問に対し、「そう思う」が 15.5%から 48.3%に大幅上昇、「どちらかといえばそう思う」の割合が 24.7%から 38.6%に上昇した([図 1])。表現意図はワークシートの記述や絵に具体的に表れたことから、課題解決(追究)型学習を用いた本授業デザインが、自分の構想のねらいを具体的にもつ手法として有効であったことがわかる。



[図 1] 作品構想におけるねらいの有無の変容

②作品に対する見方・考え方における視点の広がりについての変容

「機能性」「見た目」以外にも、意識した視点の内容や人数が増えたことから、作品のよさや価値に対する見方・考え方に広がりがあったことが [図 2] から言える。特に、「使う人の気持ち」や「作品を置く場所との調和」に関する視点を考えた人が大幅に増えたことは、作品の見方・考え方が広がった変容である。



[図 2] 表現の際に意識した視点の広がりの変容

③「表現と鑑賞のつながり」をもたせた課題解決(追究)型の授業デザインによってアウトプットした表現について

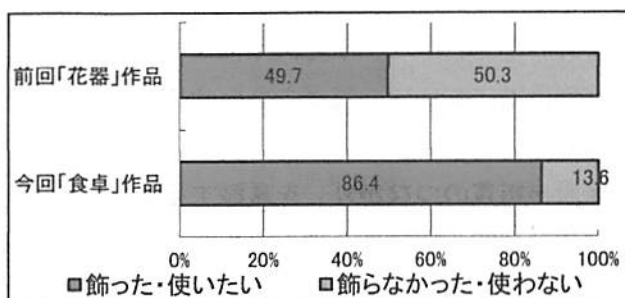
鑑賞の学習により作品のよさや価値に対する視点が広がったことは、表現意図を考える際の主体性や発想力の向上に効果的であった。それは、アイデアスケッチや作品を通じた表現に反映されている([資料 9][資料 12][資料 13])。

④生活の中の造形や美術の働きを理解し美術に主体的に関わっていく態度を育むことへの有効性

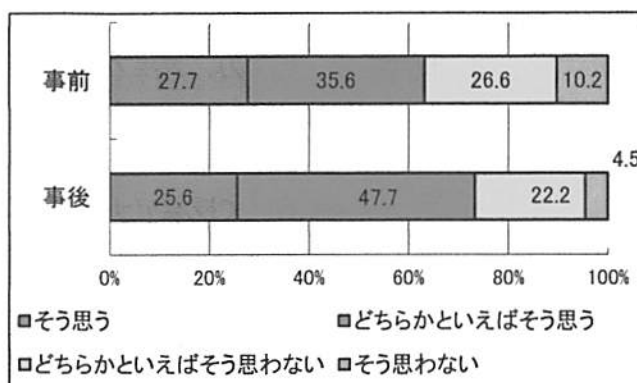
制作した作品を今後使ったり飾ったりしようと思っている生徒が前作では 49.7%であったが、本実践では 86.4%に上昇した([図 3])。生活において、作品との関わりをもちたいという意識が高まったことがわかる。日用品の形や色、使い心地を味わったり考えたりするかという質問に対

し、肯定的に回答した生徒が 63.3%から 73.3%に上昇した。([図 4])。また、今まで美術に消極的であった生徒の記述内容やとりくむ姿に特に変容が見られた。美術に消極的であった生徒の意識や態度の向上は大きな成果である。[資料 12] のアイデアスケッチを描いた生徒が一例である。

作品の価値に対する様々な視点の中で、自分が重視する要素を自己決定し、その内容を言葉でスケッチに添えて具体化したことは、指導要領に記された「自分にとっての価値をつくる」にも合致したねらいであり、作品に新たな自分の意味づけをもってとりくめた姿の表れと考える([資料 8][資料 12])。「今後の自分の在り方」などについての考えも事後の記述に表れた([資料 15])。



[図 3] 作品を使う（飾る）ことについての意識の変容



[図 4] 日用品について形や色、使い心地などを味わったり考えたりすることについての意識の変容

- ・ 普段は特に食器を何も考えずに使っていたが機能性やデザインについて考えることができるようになった。
- ・ 作った後のことを考えて、自分で一から作るのは楽しい。
- ・ 家にある食器なども色々な方向から見ていきたいと思う。
- ・ 自分が作った焼き物を使った人が、どういう反応をするか、楽しみだ。表現したいものが増えた。

6 研究のまとめ

[資料 15] 事後調査における生徒の自由記述

(1) 成果

① 自ら課題を解決する手立ての有効性

本研究では、美術への主体的なとりくみを促す指導として、課題解決(追究)型学習を用いた。授業デザインの各段階での支援により、自分で気づき考えたことをもとにした表現意図を明確にもたせることができた。美術と生活との関わりに理解を深めた内容や、今後の自分についての考えも事後の記述に表れたことは、主体的なとりくみができたと捉える。アイデアスケッチや構想を具体化した言葉や作品等には、授業で考えさせたかった課題(テーマ)が表れた。学習の高まりを尋ねた質問に、肯定的な回答をした生徒は 89.8%、発想を苦手とする生徒が多い中で発想に意欲を持てたと回答した生徒も 76.7%に昇った。美術に消極的であった生徒の変容・向上が大きかった。

② 「表現と鑑賞のつながり」を意識した授業デザイン

作品がもつ様々なよさや価値に対する見方・考え方の視点を広げ、生活への関連を実感させ、新たな創造につなぐことができた。生活の中の美術の働きに実感的な理解を深めるねらいにおいてもこの授業デザインは有効であり、表現と鑑賞を相互に働かせ一体化させた授業実践となった。

③ 本研究の汎用性

長く残る焼き物は、作品に愛着をもたせる題材とし効果が高い。しかし、この授業デザインは

他にも、特に、学習指導要領美術A表現(2)の「伝える、使うなどの目的や機能を考え、発想や構想する力」を育む上で、十分汎用性があると考えられる。ポスターやパッケージデザイン、木工芸などの発想段階において、視点をもたせやすくなり、とりくみに主体性を促すことが期待できる。

(2) 課題

①「表現と鑑賞のつながり」を意識することについて

美術には目的や機能性を伴う表現だけではなく、絵画や彫刻などの心象表現などもある。従って、3年間を見通した題材配列に一層の工夫が必要である。一題材の中で「表現と鑑賞のつながり」を意識するとともに、各題材の配列の中でも「表現と鑑賞のつながり」を工夫できるとよい。

②意欲の醸成について

創造していく過程の中で、思考力、表現力は育まれていくものであるから、その学習過程が大切であることは言うまでもない。しかし、生徒に次への意欲を喚起させるには、自己表現の成功体験によるところも大きい。作品の質が高まることは生徒自身の喜びにもなるので、基礎的技術や技術の習得とのバランスを考えて授業デザインを工夫する必要がある。生徒の日常を意識させ、生活の中の美術の働きが、自分のこととしてとらえられるよう支援の継続が必要と考える。

7 研究の発展【別の題材による実践（1学年）】

「表現と鑑賞のつながり（一体化）を意識した課題解決（追究）型による授業デザイン」は、目的や機能を考え発想・構想する力を育む上で、特に有効と考えたので、次年度に「私の会社のマーク」を題材に、同じ手法と流れを用いて授業（表2）を実践した。自分の作品に重視したい美の構成要素（シンプルさ、アクセント、バランス、対称、非対称など）を自然に意識して図案を構想することができ、さらに、表現意図をプレゼンで語ることでできたことは、本研究の授業デザインが、この題材でも有効であったと考えられる。

【表2】課題解決(追究)型学習による「私の会社のマーク」を題材にした授業デザイン

<p>1～2次 【身の回りで見かけるマークの鑑賞】</p> <p>①どのような工夫がされているか、気付いたことまとめ、工夫点を付箋に書き出す。</p> <p>②小グループで付箋を持ち寄り、気付いた内容の視点ごとに分類して、視点を見出しの言葉に表す。</p> <p>③全体で工夫点を発表し合い、図案の美の要素や作り手の願い、伝えたいことなどに「気づき」の場をつくる</p>
<p>3～4次 【自分の会社のコンセプトを決め、マークのアイデアスケッチをする（表現）】</p> <p>①ワークシートに会社のコンセプトを言葉で書く。</p> <p>②そこからイメージをふくらませアイデアスケッチを描き、色鉛筆で彩色する。</p>
<p>5～6次 【互いのアイデア図案の鑑賞・プレゼン】</p> <p>①班ごとにアイデアのプレゼンを行う。工夫の視点をキーワードにしたカードを各班に用意し、自分の図案のコンセプトについて、重視した視点を、キーワードを使って伝えるとともに、作品のPRをする。</p> <p>②各班の司会者の運営で、質疑やアドバイスなどを出して話し合う。</p> <p>③他者の批評や助言を受け、必要に応じて自分の図案を改良し、ケント紙に下絵を描く。</p>
<p>7～8次 【ケント紙への着色（表現）】</p> <p>①平塗りの基礎練習を簡単に行った後、ケント紙の図案に着色をする。</p> <p>②完成したマークを掲示し、鑑賞しあう。</p>

【主な引用／参考文献等】

- ・大橋功「21世紀型能力と美術教育」『美術教育7月号No.877』2015
- ・西村徳行『「みる」と「つくる」をつなぐ～鑑賞教育の10年その成果と課題』『教育美術6月号No.888』2016
- ・村上尚徳「中学校学習指導要領実施上の課題と改善(美術)」『中等教育資料7月号No.962』2016
- ・佐々木達行『造形教育における授業デザインと授業分析』東洋館出版社2011
- ・新野貴則「図画工作科・美術科教育における主体的な学びに関する考察」『美術教育学第35号』2014
- ・奥村高明「鑑賞教育の課題と今後の展望」『美術教育6月号No.888』2016

資料

- | | |
|---------------------|----------------|
| (1) 27年度実践の様子 | 「花器 ～我が家の家宝に～」 |
| (2) 28年度実践の様子（本研究） | 「食卓を笑顔にする焼き物」 |
| (3) 29年度実践の様子（発展実践） | 「私の会社のマーク」 |

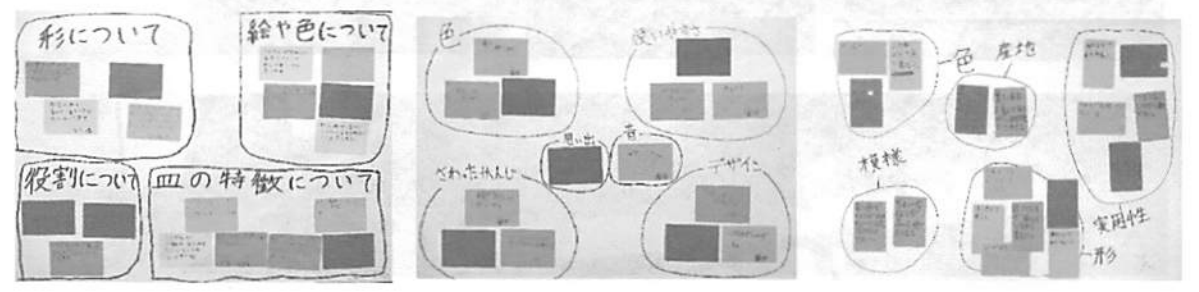
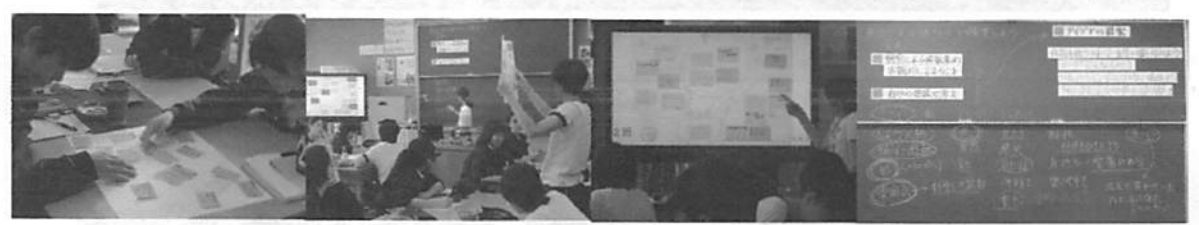
(1) 27年度実践の様子

「花器 ～我が家の家宝に～」



(2) 28年度実践の様子 (本研究) 「食卓を笑顔にする焼き物」





3. 決められるもの(にと)・ニーズ

テーマ・お題 絵や色を自由に描きかける

①(お題あり) 絵や色を自由に描きかける

②(お題なし) 絵や色を自由に描きかける

③(お題あり) 絵や色を自由に描きかける

④(お題なし) 絵や色を自由に描きかける

4. マテリアルを自由に描きかける

①あったらいいよ、自由に描きかける

②あったらいいよ、自由に描きかける

③あったらいいよ、自由に描きかける

④あったらいいよ、自由に描きかける

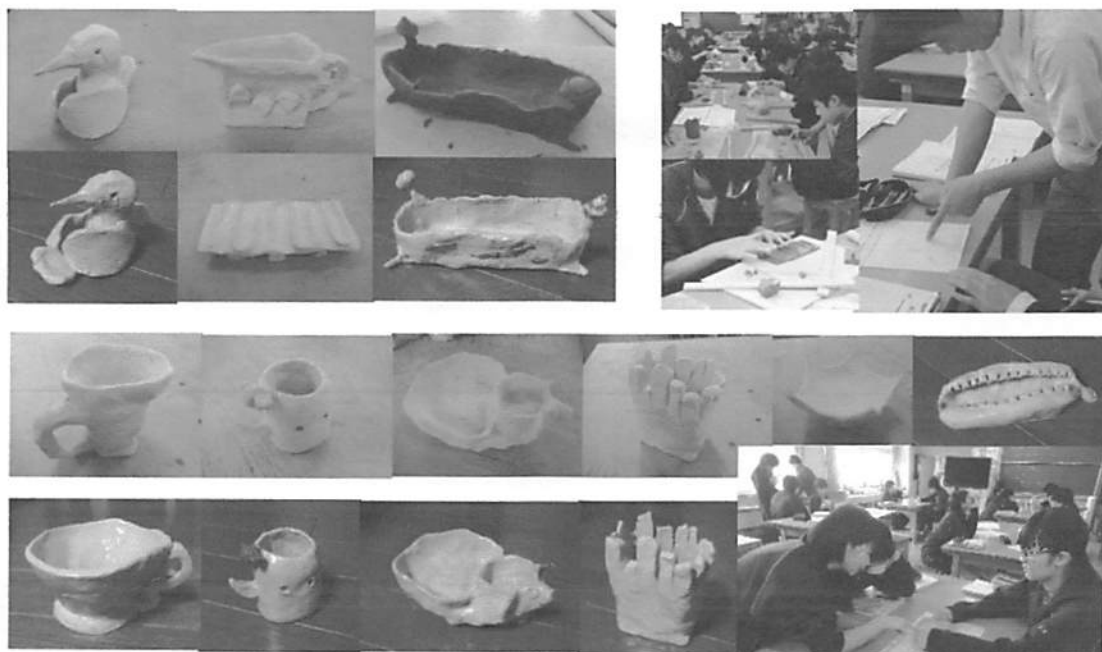
作業タイトル: 『絵や色を自由に描きかける』

①アイデアスケッチ (同じ、作業コンセプトを説明することばを添えて下さい)



①

②



(3) 29年度実践の様子（発展実践）「私の会社のマーク」

意味 **わかりやすさ** **売り物**

強調 **関係**

文字 **工夫** **表し方**

1-A 4班

シンボルマークをデザイン

目的・伝える目的を明確にする

視覚的に表現しやすくデザインされたものがよく伝わりやすい。それ以外のことも考え、考慮する必要がある。

中でもシンボルマークのデザインは、伝えたい内容を分かりやすく、また視覚的に表現する。設計が明確なものは、伝わりやすさや視覚的なシンボルマークである。

どんな個性？どんな表現？（個性を大切に）

1-A 4班 4班

目的・伝える目的を明確にする

- 円の中に basketball の文字をいれ、その外側にボールの模様を入れる。
- 円の中に 球を入れることでシンボルマークにする。
- 球の模様をそのまま入れる。

視覚的に伝えること

「球」の文字をいれ、その外側にボールの模様を入れることで、視覚的に伝えることができる。